

國學院大學學術情報リポジトリ

助動詞ラムの連体形について：
その意味記述をめぐって

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三宅, 清 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000962

助動詞ラムの連体形について —その意味記述をめぐって—

三宅 清

キーワード：ラム 連体形 意味 現在推量 源氏物語

1 はじめに

ラムは、現在推量の助動詞といわれるが、辞書類をみると、ラムの連体形（以下、特に断らない限り、ラムはラムの連体形を指す。）に限っては、伝聞、婉曲などの意味記述がなされている。例えば、『古語大辞典』（小学館¹⁾）では、

伝聞・婉曲を表す。・・・という。・・・ような。

と記述され、以下の例が挙げられている。

*いにしへに恋ふらむくトイウ>鳥はほととぎすけだしや鳴きし吾が思へるごと（万葉2・112）

*これをかなしと思ふらむくヨウナノ>は、親なればぞかしとあはれなり（枕草子267）

*宿世などいふらむくトイウ、ヨウナ>ものは、目に見えぬわざにて、親の心の任せ難し（源氏・若菜下）

*嘆くらむくトイウ、トイワレル>心を空に見てしがな立つ朝霧に身をやなさまし（新古今¹⁴¹¹）

上掲の例は、各々、私にく >で訳を付けたように、伝聞、婉曲のどちらかが当てはまりそうである。しかしながら、伝聞と婉曲とはその意味を異にする。すべてのラムに通底する意味はないのだろうか。その点について考察を加えていく。以下、源氏物語のラムを2-1「他者の心中が対象の場合」2-2「空間的距離が存する場合」2-3「「いふラム」の場合」3「時間的

距離が存する場合」に四分類し、4では源氏以前の作品も検証していく。

2-1 源氏のラムー他者の心中が対象の場合

源氏において、ラムは124例みられる。

1 殿に帰り給ひても、とみにもまどろまれ給はず、またあひ見るべき方なきを、ましてかの人の思ふらむ心の内、いかならむと心苦しく思ひやり給ふ。(帚木73・5)

1は、源氏が、空蟬がどんな気持でいるかと、空蟬の心中を思いやっている場面。ラムに上接する「思ふ」の主体は【空蟬】、ラムと判断しているのは<源氏>である。

2 さうじみの、物は言はで思し埋もれ給らむ様、思ひやり給ふもいとほしければ、(末摘花217・9)

2は、本人(末摘花)が物も言わずふさぎ込んでいるのではと、源氏がおの様子を想像するにつけても、気の毒に思われて・・・という場面。「思し埋もる」の主体は【末摘花】、ラムと判断しているのは<源氏>である。

3 さる聖のあたりに生ひ出でて、この世の方様はたどたどしからむと推し量るるを、をかしの事や。後ろめたく思ひ捨てがたくもて煩ひ給らむを、もし暫しも後れむ程は、譲りやはし給はぬ」などぞ宣はする。(橋姫1515・12)

3は、八の宮が、姫君たちの行く末が心配で振り捨てられず、困っている、という場面。ラムに上接する「もて煩ひ給ふ」の主体は【八の宮】、ラムと判断しているのは<冷泉院>である。

これらの例に共通するのは、ラムと判断しているのが、ラムに上接する事態の主体と異なる人物であるということである。換言すれば、他者の心中をラムと判断している。同様のことが4～6にもいえる。以下、ラムに上接する事態の主体を【 】で、ラムと判断している主体を< >で示す。

4 姫宮は、人の思ふらむことのつつましきに、とみにもうち臥され給はで、頼もしき人なくて世を過す身の心憂きを、(総角1599・3)

4は、<姫宮>は、【人(女房たち)】がどう思っているかときまりわなくて・・・。

5 各々思ふらむが人笑へにをこがましきこと、と思ひ乱れ給ふに、心地も違ひていと悩ましく覚え給ふ。(総角1640・12)

5は、<大君>は、【女房たち】が各々思っていることを(考えると)もの笑いな、愚かしいことと悩んでいる……。

6 乳母、「いと傍痛し。事しもあり顔に思すらむを、ただおほとかにて見え奉り給へ。右近の君などには、事の有様初めより語り侍らむ」(東屋1831・2)

6は、<乳母>は、【中の君】が何かわけありげにお思いになるだろうに、……。他者の心中はラムと判断している主体からは不確実なものである。このような他者の心中をラムと判断している例が67例と、最も多くみられる。この場合、ラムと判断しているのは、テンスとしては現在である。そして、その場合の他者の心中は、ラムと判断している場合と同じく、テンスとしては、現在である。また、ラムは、ここでは、話し手²⁾の想像の中で、他者の心中(=命題)が真であると判断しているので、意味としては「推量」といえる。すなわち「現在推量」である。そして、推量には、「不確実性」が伴う³⁾。以下、主に、この不確実性に焦点を当て、論を進めていく。

2-2 源氏のラム—空間的距離が存する場合

7 かの御祖母北の方、慰む方なく思し沈みて、おはすらむ所にだに尋ね行かむと願ひ給ひしるしにや、終に亡せ給ひぬれば、またこれを悲しび思すこと限りなし。(桐壺19・7)

7は、御祖母北の方は、心を静める方法もなく悲嘆にくれていて、せめて娘の更衣のいる所になりと尋ねてゆきたいと願っていたという場面。御祖母北の方と娘の更衣のいる場所は離れている。換言すれば、両者の間には空間的距離があり、思っている御祖母北の方にとって、ラムの主体の娘の更衣がそこにいるかどうかは不確実なことである。

8 客人たちは、御女たちの住まひ給ふらむ御有様思ひやりつつ、心つく人もあるべし。(権本1550・13)

8は、客人たちは、姫君たちが暮らしている様子を思いやっては、気を揉ん

でいる人もいるにちがいないという場面。気を揉んでいる客人たち（心づく人）にとって、ラムに上接する姫君たちの暮らしぶりとは、「思ひやりつつ」とあるように、距離があってはっきり分らない、不確実なことである。

9 黒き几帳の透影のいと苦しげなるに、ましておはすらむ様、ほの見し明暮など思ひ出でられて、(椎本1567・2)

薫は、黒い几帳から透けて見える大宮の姿がほんとうに痛々しく感じられるので、まして、(日々) 過ごしている様子、また、いつぞやお姿をかいま見た明け暮れのことなど思い出さずにはいられなくてという場面。ラムと判断している薫にとって、ラムに上接する「おはす」は大宮の日々の暮らしの様子で、離れている薫にとって不確実なことである。

10 物語のついでに、「忍びたる様にものし給ふらむは、誰にか」と問い給ふ。(手習2012・3)

10は、話のついでに、「(人目を) 忍ぶようにしている方は、誰ですか」と尋ねるという場面。ラムと判断しているのは薫で、ラムに上接する「ものす」は浮舟の行為で、「誰にか」からも分かるように、距離があり、不確実なことである。

11 住むらむ山里はいづこにかはあらむ、いかにして様あしからず尋ね寄らむ、僧都に会ひてこそは、確かなる有様も聞き合せなどして、ともかくも問ふべかめれ」などただこのことを起き臥し思す。(手習2049・14)

11は、大将は、「女君の住んでいる山里はどこなのだろう。どうしたら世間体も見苦しくないようにして訪ねていくことができるだろう。僧都に会って確かな事情をも聞き合せなどして、何にしてもまず訪ねてみるのがよさそうだな」と、ただそのことを寝ても覚めても考えているという場面。ラムに上接する「住む」の主体は、女君。ラムと判断しているのは、大将。「いづこにかはあらむ」から分かるように、「住む」は、思っている大将にとっては、距離があり、不確実のことといえる。

2-2に属するラムも、2-1と同様、不確実性を伴う。また、2-1で触れた、他者の心中を対象とする場合も、他者の心中は、ラムと判断している主体からは、空間的距離があるともいえよう。

2-3 源氏のラムー「いふラム」の場合

ラムが「いふ」に下接する例が以下の4例みられる。()内に私訳を付けた。

12宿世などいふらむものは、目に見えぬわざにて、親の心にまかせがたし。
(若菜下1205・11)

((女子)の運などというものは目に見えないもので、親の気持ち通りにはなりにくいものだ。)

13この宣ふすち宿世といふらむ方は、目にも見えぬことにて、いかにもいかに思ひたどられず。(総角1618・1)

(今仰せの宿世というものは、目にも見えぬもので、なんとしても納得できない。)

14中納言も、過ぎにし方の飽かず悲しきこと、そのかみより今日まで思ひの絶えぬ由、折々につけて、あはれにもをかくも泣きみ笑ひみとかいふらむやうに聞え出で給ふに、(早蕨1680・1)

(中納言も、(姫君の)亡くなられたのがいつまでもあきらめがたく悲しいこと、その当時から今日までずっと忘れられないこと、折々につけて、しみじみと興深く感じられたことを、泣いたり笑ったりとかいうようにお話し申し上げなされるので、)

15「げに隔てありと思しなすらむが苦しさに、物も言はれでなむ。あさましかりけむ有様は、珍らかなることと見給ひてけむを、さて現心も失せ、魂などいふらむものも、あらぬ様になりけるにやあらむ、(夢浮橋2066・7)

(ほんとうに(私が)隔てを置いているとお取りになるのがつらくて、何も言うことができません。情ない姿をしていた(私の)有様は、珍しいこととご覧になっただろうが、そうしたことで(私は)正気も失せ、魂などというものも、(以前とは)違うものようになってしまったのだろうか、)

ラムは敢えて訳さなかったが、ラムに上接する「などいふ」「といふ」「と

かいふ」は、それだけで伝聞を表す形式である。しかしながら、2-1、2-2で述べたように、ラムには、不確実という要素が関わる。その延長線上で考えると、「宿世」「魂」などというものは、簡単にいってしまえば目に見えない、その存在が不確実なものである。14は、不確実という要素からは説明できないが、諸本間の異同をみると、「いふやうに」となっている本も複数みられる⁴⁾。2-3もやはり、不確実性が存する。

また、次のような例も2例みられる。

16「なほしるべせよ。我は好き好きしき心などなき人ぞ。かくておはしますらむ御有様<こうしてお暮しのご様子>の、あやしくげになべてにおぼえ給はぬなり」と、こまやかに宣はば、(橋姫1522・9)

17つれづれとのみ過し侍る世の物語も聞えさせ所に頼み聞えさせ、またかく世離れてながめさせ給ふ<こうして世間を離れてもの思わしくお暮し>らむ御心の紛らはしには、さしも驚かせさせ給ふばかり聞え馴れ侍らば、いかに思ふ様に侍らむ(橋姫1525・13)

16、17は、波線部「かく」という指示詞によって、ラムに上接する事態が話し手の眼前で行われていることが分かる⁵⁾。この場合は、話し手とラムに上接する事態の空間的距離は無いに等しい。

3 源氏のラム—時間的距離が存する場合

ラムには、時間的距離が認められる例も少数ながらみられる。それらはツラムが用いられている。ツラムは14例存する⁶⁾。

18院も、ただ今一度目を見合せ給へ、いとあへなく限りなりつらむ程をだに、え見ずなりにけることの悔しく悲しきを、と思し惑へる様、とまり給ふべきにもあらぬを、見奉る心地ども、ただ推し量るべし。(若菜下1184・10)

18は院の殿が、紫の上のあっけない臨終だった、その時(=限りなりつらむ程)にさえも会えなかったことを悔やんでいる場面。

19心を尽して詠み出で給ひつらむ程を思すに、(末摘花225・11)

19は、源氏が、そこにはいない末摘花の歌を見て、懸命になって詠み出した

有様を思うと・・・という場面。

20「いとあさはかなる人々の嘆きにも侍るなるかな。まことに、いかなり
ともと、のどかに思ひ給へつる程は、おのづから御目離るる折も侍りつ
らむを、中々今は何を頼みにてかは怠り侍らむ。今御覧じてむ」(葵316・
6)

20は源氏が、左大臣邸にいずれそのうちにはと気長に考えておりました頃は、
自ずとお目に掛からない折もございましたが、・・・という場面。

ツラムは、18では紫の上の死に立ち会えなかった、19では「詠み出で給ふ」
末摘花はその場にいない（源氏は歌の書かれた消息を見ている）というよう
に、ツラムに上接する事態は、ラムと判断している時点で、それ以前に成立
している。そこに時間的距離が存する。18、19のように、他者の行為がツラ
ムの対象の場合は、不確実性が認められる。それに対し、20の「おのづから
御目離るる折も侍り」は話し手の源氏自身の行為である。その行為は20もラ
ムと判断している以前に成立しており、時間的距離が存するが、ツラムに上
接する行為は話し手自身の行為であり、確実な事態である。このような例は、
ツラムに3例みられるのみで、時間的距離が存する場合も、おおむね不確実
性を伴うといえよう。

ツラムは、ツラウと形を変え、中世には、特に口頭語でケムに取って代わ
るが、源氏では、ツラムとケムとは異なる。次に源氏のケムの連体形の例を
挙げる⁷⁾。

21夜深き程に、人を静めて出で入りなどし給へば、昔ありけむ物の変化め
きて、うたて思ひ嘆かるれど、(夕顔114・7)

22鄂州にありけむ昔の人も、かくやをかしかりけむと、耳とまりて聞き給
ふ。(紅葉賀257・1)

23右は「かくや姫の上りけむ雲居は、げに及ばぬことなれば、誰も知りか
たし。(絵合565・4)

24仏のかくれ給ひけむ御名残には、阿難が光放ちけむを、二度出で給へる
かと疑ふさかしき聖のありけるを、闇に惑ふ晴け所に、聞え犯さむかし」
(紅梅1453・12)

25世の営みに添へても、思すこと多かり。いかなることと、いぶせく思ひ
渡りし年頃よりも心苦しうて、過ぎ給ひにけむ古へぎまの思ひやらるる
に、罪軽くなり給ふばかり行ひもせまほしくなむ。(椎本1553・8)

26顔を見むとするに、昔ありけむ目も鼻もなかりける目鬼にやあらむとむ
くつけきを、頼もしういかき様を人に見せむと思ひて、衣を引き脱がせ
むとすれば、うつぶして声立つばかり泣く。(手習1992・13)

27かくや姫を見つけたりけむ竹取の翁よりも珍しき心地するに、いかなる
物の隙に消え失せむとすらむと、静心なくぞ思しける。(手習2003・10)

28尼君、「光君と聞えけむ故院の御有様には並び給はじとおぼゆるを、ただ
今の世にこの御族ぞめでられ給ふなる。右の大臣殿」と宣へば、(手習
2044・2)

ツラムとケムとの上接形式、下接形式に注目すると、ケムは、上掲の例か
らも分かるように⁶⁾、「昔」、「かくや姫」、「古へぎま」、「故院」など、過去を
表す名詞が多い。それに比べると、18、19、20のツラムは、現在より以前の
出来事だが、ケムよりも現在に近い。それは、ツラムのツが完成相を表す、
アスペクトとして機能しているからであろう⁸⁾。

4 源氏以前の作品におけるラム

本節では、源氏以前の主な作品におけるラムの連体形の状況をみていく。
扱う作品は、万葉集、竹取物語、古今和歌集、伊勢物語、土佐日記、後撰和
歌集、蜻蛉日記、宇津保物語、落窪物語、枕草子の10作品である。各々のラ
ムの用例数は、万葉58、竹取2、古今3、伊勢0、土佐0、後撰5、蜻蛉2、
宇津保52、落窪6、枕草子11である。源氏は前述のように124例みられるので、
作品の長短はあるが、ラムは量的に源氏に特徴的といえる。

次に、各作品の質的な面をみていく。第2節で分類した類型を基にする。

○「他者の心中を対象とする場合」

<万葉集>

29・・・いや遠に 里は離りぬ いや高に 山も越え来ぬ 夏草の思ひ萎
えて 偲ふ<妻が私ヲ偲ンデイル>らむ 妹が門見む なびけこの山

(131)

30・・・はしきやし わが妻の児が 夏草の 思ひ萎えて 嘆くく妻ガ嘆
イテイル>らむ 角の里見む なびけこの山 (138)

31しぐれ降る暁月夜紐解かず恋ふく私ヲ恋シガッテイル>らむ君と居らま
しものを (2306)

32遠き妹が振り放け見つつ偲ふく妹ガ私ヲ偲ンデイル>らむこの月の面の
雲なたなびき (2460)

<宇津保物語>

33宮、「いかに。かの中将の思ふく左大将ガ中将ノ心中ヲ思ッテイル>ら
む気色はいかがある。」(内侍のかみ171・15)

34久しくなりにければなむ。日頃もの騒がしく思すくあて宮ガ女一宮ノ
思ッテイル>らむに、静かにと思ひ給へつる程になむ、今までになりに
ける。(沖つ白波297・2)

35「なほ、これなむいと見苦しく見奉る。今は心静かに、時々は行ひもし
て」あらむ。宮の思すく(俊蔭ノ娘ガ言ウニハ)女三宮ノ思ッテイル>
らむこともあり。これよろしきに聞え給へ」(楼の上上436・15)

<落窪物語>

36御妹、限りなく時めき給ひて持給へり。わが御おほえばかりと思すく自
分バカリガ帝ノ寵愛ヲ受ケテイル>らむ人、うちあふべくもあらず」な
ど言ひて往ぬれば、かひなし (176・15)

37女君は、大臣の思すく女君ガ父中納言ノ心中を思ッテ>らむことを推し
量り給ふに、物も興もなく、いとほしきことを思ほす。(299・10)

<古今和歌集>

38惜しむく私ハ、名残惜シク思ッテイル>らむ人の心を知らぬまに秋のし
ぐれと身ぞふりにける (398)

上掲の例で、< >内に私に人間関係を示したように、ラムの主体が、他
者の心中を推し量っている。この類型は、源氏には67例とラムの中では最も
多かったが、源氏以前の作品では、万葉3、竹取0、古今1、後撰1、蜻蛉
0、宇津保8、落窪2、枕2と少ない。源氏に特徴的な類型といえる。

○空間的距離が存する場合

<万葉集>

39何時しかと待つ<何時帰ッテ来ルカト待ッテイル>らむ妹に玉梓の言だ
に告げず去にし君かも (445)

40梓弓春山近く家居らば継ぎて聞く<春山近クノ家ニ住ンデイタラ、絶エ
ズ聞イテイル>らむうぐすの声 (1829)

万葉集には、次に挙げるように、明らかに他者の心中を対象としているが、空間的距離が存する例もみられる。

41彦星の思ひますらむ心より見る我苦し夜の更け行けば (1544)

41は、「思ひます」の主体の「彦星」と、それを地上で見ている「我」との間には空間的距離が存するが、同時に「彦星」という「我」にとっては他者の心中をも対象としている。これは極端な例かもしれないが、2-2で触れたように「他者の心中」は、ラムと判断している主体には見聞きできない空間的距離があるとも考えられる。

<宇津保物語>

42また侍る所にもものし給ひしかば、あはれにむつましき者に思ひ聞えしか
ども、あやしう、年頃山里に籠りものし給ふ<コノ数年山里に籠ッテイル>らむは、世の中に倦じ給ふことやあらむ。(国譲上26・14)

43「人々のものすく他ノ后タチノスル>らむことは、ここには<私ハ>え
知らず。面伏せなりと思さば、見給ふまじくこそはとなむ」(蔵開下563・
7)

44忘るなど契り置きけむたらちねも笑みて見るらむ雲の上にて<雲ノ上テ
見テイル> (国譲中232・7)

<落窪物語>

45帯刀かくまばゆきことを大臣も聞き給ふ<帯刀ハ、コノヨウニハズカシ
イコトヲ中納言モ聞イテイル>らむに、ここにあらむことも便なれば、
御車の後に乗りて往ぬ (111・1)

宇津保にも、源氏でみられたラムに上接する事態が眼前で行われている例がみられる。

46「かく言ひたらば」など聞こゆれば、「誰ぞ、君をかく言ふくアナタニコ
ンナコトヲ言ウ>らむは」など宣ふ。(藤原の君143・8)

46は、波線部「かく」という指示詞によって、ラムに上接する「君を言ふ」
が話し手の眼前で行われていることが分かる。以下、類例を挙げる。

47大将、「今はかくおとなしくなり給ひて、子かき抱き給ふくサマ宮モ、今
ハコノヨウニ一人前ニナッテ、子供ヲ抱ク>らむこそ。あな恥かしや。」
(蔵開下534・5)

48一日も聞えさすべかりけれども、かくておはすくコウシテココニイラッ
シャル>らむとも、え知り給へでありしを。(蔵開下553・8)

49これも、院のかく思し騒ぐく朱雀院ガ、(アナタガ) コウシテ案ジテ騒グ
>らむを聞き給ふらむところ、苦しう覚え侍るらむ。(国譲下377・12)

○いふラムの場合

源氏以前の作品では、次の1例のみである。

50命死なばいかかはせむ、生きてあらむ限りはかくありて、蓬萊といふら
む山に遭ふやと、(竹取19・5)

○時間的距離が存する場合

紙幅の関係上、以下に各々の作品のツラムの用例数のみを挙げる。

万葉0、竹取0、古今0、後撰0、蜻蛉1、宇津保8、落窪0、枕2

5 おわりに

従来、辞書類で「伝聞」「婉曲」などと扱われてきたラムの連体形について、
主に「不確実性」という観点から考察を加えた。その不確実性は、ラムの「話
し手の想像の中で、他者の心中、空間的に離れている行為などの命題が真で
であると判断する」という「推量」の結果と捉えられる。そして、テンスとし
ては、「現在」である。換言すれば、「現在推量」となる。ラムの場合、「伝聞」
「婉曲」などは、意味というより訳し方ではないのか。現在推量の現代語とし
てはダロウがよく訳出されるが、現代語のダロウとラムとは異なる。した
がって、本稿では、私に現代語訳を付した箇所、ダロウは敢えて用いなか
った。本稿の趣旨は、ラムが現代語の推量形式の何に当るかを問題にするので

はなくて、つまり現代語訳を考えるのではなく、ラムの連体形に通底する意味を明らかにすることにある。

上述の現在推量は極めてモーダルな意味である。それが連体形に用いられているのは、現代語を考慮すると、不可解である⁹⁾。しかしながら、中古では、連体形の機能として、連体修飾の他に準体句を形成することもある。すなわち、連体形の構造が現代語のそれとは異なるということである¹⁰⁾。

また、源氏以前の作品との比較により、ラムの連体形は、量、質（特に2-1「他者の心中を対象とする場合」）ともに源氏に特徴的であることも判明した。

連体形の構造と、いわゆる推量、推定の助動詞との関係や、源氏以後の源氏の影響を受けている作品におけるラムのふるまい等は、今後の課題としたい。

注

- 1) 例えば、「日本国語大辞典」（第二版・小学館）では、「連体修飾文節に用いられて、自分の直接経験ではないが、他から聞いたこと、世間一般で言われていることを受け入れて推量する意を表わす。」と記述されている。本稿では「連体修飾」だけではなく、いわゆる準体句も対象とした。
- 2) 心内文の場合は「思っている人」。
- 3) 例えば、三宅知宏（1995）では、推量は、「結果としてその命題の真偽は不確実である」との指摘がある。また、仁田義雄（2000）では、「推量は、事態の成立・存在を不確かさを有するもの・確かさに欠けるものとして捉えている・・・」と述べられている。
- 4) 青表紙本系の御物本、池田本、三條西家本など。
- 5) 例えば、岡崎友子（2010）の「直示用法」＝「今、現場で目に見える、直接知覚・感覚できる対象があるもの」との規定が示唆的である。
- 6) ちなみに、源氏においてヌラムは、1例みられる。
- 7) ケムの連体形は、源氏において、109例みられる。
- 8) 例えば、三宅 清（2002）では、ツラウのツは過去（つまりツラウで過去推量を表す）を表すが、ツラムのツはアスペクト（完成相）を表していると述べた。山田 潔（1993）ではツラムは「近い過去の事柄（厳密に言えば「つ」によって把握されるような事柄）に対する推量を表わす」と述べられている。

- 9) 三原健一 (1995) では、「であろう」は「だろう」に比べ、連体修飾節に入りやすいと指摘している。
- 10) 小松英雄 (1988) の「各句節間の相互関係は、つねに必ずしも緊密でない。」という「連接構文」などの捉え方も考慮してもよいのではないか。

使用テキスト

源氏物語・・・源氏物語大成校異篇 (中央公論社)

宇津保物語 落窪物語・・・新編日本古典文学全集 (小学館)

万葉集 竹取物語 伊勢物語 土佐日記 蜻蛉日記 枕草子 古今和歌集
後撰和歌集・・・新日本古典文学大系 (岩波書店)

用例後の () 内は頁数・行数 (歌集は歌番号) を表す。表記は適宜改めた。

参考文献

岡崎友子 (2010) 『日本語指示詞の歴史的研究』 ひつじ書房

小松英雄 (1988) 『仮名文の構文原理』 笠間書院

仁田義雄 (2000) 『日本語の文法3 モダリティ』 岩波書店

三原健一 (1995) 「概言のムード表現と連体修飾節」『複文の研究 (下)』 くろしお出版

三宅 清 (2002) 「古代語の複合辞に関する一考察—「つらむ」と「つらう」—」『学芸国語国文学』 第34号

三宅知宏 (1995) 「「推量」について」『国語学』 第183集

山田 潔 (1993) 「複合助動詞「つらむ」の用法に関する一考察」『学苑』 638号